

高等学校における言語生活を見つめる学習指導の試み

―「打ち言葉」の学習指導を取り上げて―

矢野 祥子

一 取組の目的

現代の高校生の言語生活を考える上で欠かせないのが、インターネット上でのやりとりである。多くの高校生がスマートフォンを所有し、LINEやInstagram、X(旧「Twitter」)といったSNSツールを使って、通話以上に文字によるコミュニケーションを取っている(今年度本校調査、一年次生の93%がLINEを、65%がInstagramを使用)。パソコンやスマートフォンによる書き言葉でありながら話し言葉のように用いられる「打ち言葉」が日常的に使われ、新しい国語として日々存在感を増す一方で、SNSでの言葉のトラブルも発生している。「打ち言葉」においても、言葉を適切に用いる力を身に付け、他者と良い人間関係を築けるようになってほしいと考え、高等学校における「打ち言葉」の学習指導の実際と効果について実践を試みた。

二 新学習指導要領との関連

新学習指導要領の「現代の国語」においても、実社会における国語による諸活動に必要な資質・能力を育成する科目として、「話すこと・聞くこと」の領域の学習の充実が求められている。「知識及び技能」に関する目標(1)には「実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする」と示され、内容の「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項 イ」には、話し言葉の「特徴や役割、表現の特色を踏まえ、正確さ、分かりやすさ、適切さ、敬意と親しさなどに配慮した表現や言葉遣いについて理解し、使うこと」とある。話し言葉については、学習指導要領解説において「文化審議会国語分科会『分かり合うための言語コミュニケーション(報告)』(平成三十年三月)で『打ち言葉』と呼ばれているソーシャル・ネットワーク・サービス等における即時的性格を持った書き言葉の媒体や、音声を中心としなが

らも持続性を持つ画像・映像媒体も登場しており、従来の、話し言葉と書き言葉の違いだけでは捉えきれない状況が生じている。」と述べ、さらに、「国語分科会報告も踏まえ、正確さとは、互いにとって必要な情報を間違いなく伝え合うことであり、分かりやすさとは、互いが十分に情報を理解できるように、表現を工夫して伝え合うことである。また、適切さとは、場面や状況、相手の気持ちに配慮した話題や言葉を選び、適切な手段を通じて伝え合うことであるが、同旨を国語分科会では『ふさわしさ』としている。敬意と親しさとは、伝え合う者同士が近づき過ぎず、遠ざかり過ぎず、互いに心地よい距離感に立って伝え合うことである。」と説明している。

この「正確さ、分かりやすさ、適切さ（ふさわしさ）、敬意と親しさ」は、まさに「打ち言葉」で直面する課題であり、新科目「現代の国語」で取り組むべき内容と言える。不用意な「打ち言葉」でインターネット上の人間関係を損なったり、いわゆる「炎上」といった大きなトラブルに発展したりした場合、その問題は現実の人間関係や日常生活にも大きな影響を及ぼす。

国語分科会報告のⅠの2「分かり合うためのコミュニケーション」において、「『打ち言葉』でのやり取りが広がる」として、次のように述べている（注1）。

なお、電子メールやSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス Social Networking Service：日々の記録やメッセージの交換などを通じて、友人・知人や、趣味や生活環境などに共通点を持つ人たちと、インターネット上で社会的なつながりを持つことを目的としたサービス）などのテキストのやり取りは、文字に表すという点では書き言葉に入る。しかし、互いのやり取りが比較的短い時間で行われ、一回のやり取りで交わされる情報量も少ない媒体においては、話し言葉に近いものも多く用いられる。こうした、話し言葉の要素を多く含む新しい書き言葉を、本報告では「打ち言葉」と呼ぶ。「打ち言葉」は、主にインターネットを介しキーを打つなどして伝え合う、かつてはなかった新しいコミュニケーションの形である。しかし、これらのやり取りも、互いに理解を深めていくための受け止め合いであることに変わりはない。

さらに、同報告のⅡの2「これからの時代のコミュニケーション」の中で、「目的に合った手段・媒体を選び適切に用いる」として次のように述べられている。

話し言葉では、対面の会話のほか電話など、書き言葉では、通知文書や手紙、ファクシミリ、メモなど、そして、程度に差はあるが双方の性質を備え持つ「打ち言葉」では、電子メー

ルやSNS、チャットなどの媒体が用いられている。(電子メールには、書き言葉の性格が強いものも多い。)これらの媒体には、やり取りにおける時間差の程度、一方向のか双方向のか、匿名で用いることができるかどうか、情報が不特定多数の人に広がりやすいかどうかなどにおいて、それぞれ特性がある。用いることのできる要素(表情、音声、文字、記号、絵文字、画像等)が異なるところも少なくない。これらの特性を踏まえ、目的に応じた適切な媒体の選択を意識したい。すなわち、高度情報社会である現代においては、「打ち言葉」

についてもその特性を理解し、目的に応じて適切に用いる力が必要とされている。現代の高校生は、国語の授業で学ぶ「話す・聞く」力を「打ち言葉」においても発揮し、インターネット上で他者とつながる際に、言葉を正確に、分かりやすく、適切に使えるようになることが強く求められている。高等学校の国語教育において、「打ち言葉」は新たな学習課題といえる。

「打ち言葉」の研究については、内山和也が背景や概念についてまとめている(注2)。他にも研究や報告はいくつか見受けられるが、高等学校までの教育現場でのものはまだ少ない。

森谷剛は、音声言語の視覚化を試みた授業実践の中で、『「音声言語」ではなく、タイピングによる『打ち言葉』によって話

し合いを進める班が出没した」と指摘し、中学生が自然に「打ち言葉」を活用している現状を紹介するとともに、これを音声言語(話し言葉)として捉えてよいかとの疑問を提示し、「話し言葉」と「打ち言葉」とを同一視できないことについて問題提起している(注3)。

また、山梨県立山梨高等学校国語科「『打ち言葉』に関する授業実践」(令和三年度国語問題研究協議会取組報告)では、生徒の書く感想や日誌に「打ち言葉」が散見される現状から、「打ち言葉」の特徴を考える授業と、「書き言葉」としてのメールを書く授業を実践し、高校生は「話し言葉」「書き言葉」「打ち言葉」の境界が曖昧であることを指摘するとともに、「現代の国語」において社会で必要となる言語コミュニケーションに対する理解を深める必要性を述べている(注4)。他に目立った実践事例は見受けられず、今後様々な実践が新たに積み重ねられるであろう学習課題の一つであると思われる。

本稿の実践は、生徒が自身の「打ち言葉」を擬似体験する中で「打ち言葉」の特徴や、「話し言葉」との違いに気づくことで、自己の用いる言語に意識的になることを目的として、「現代の国語」の趣旨を生かして二〇二二年度三年次の「現代文B」と二〇二三年度一年次の「現代の国語」の授業において取り組ん

ものである。後者については、一人一台端末の環境が整ったことから、学習の場面において端末を活用することができた。

三 単元全体の流れ

【目標】現代のコミュニケーションの言葉を身に付ける。

【育てたい力】「話し言葉」「打ち言葉」の知識・技能

第一次 コミュニケーションとしての言葉を認識する

教科書教材…「世間話はなぜするか」(松井智子)

「非言語コミュニケーション」(末田清子)

第二次 「打ち言葉」の特色と注意点を学ぶ

第一時 「打ち言葉」の特色について理解する

第二時 「打ち言葉」を「書き言葉」に変換する

第三時 メールでの「書き言葉」を身に付ける

四 「打ち言葉」の学習

普段自分達が使っている「打ち言葉」の特色を理解した上で、LINEなどで使われる即時的で短い言葉による話し言葉に近いやり取り、メールなどで使われる書き言葉に近いやり取りにつ

いて考察し、それぞれの利点や注意点について学習した。

(二) 第一時 「打ち言葉」の特色について理解する 図1 班シート「話し言葉と打ち言葉の記入」

まず、班ごとに、対面で話す「話し言葉」で、「今日放課後どこか行こう!」というテーマで会話してもらい、一人一台端末を活用して、「話し言葉」については、Chromebookで班ごとに会話を録画した後、録画を見返して班シートに記入した。次に、短い書き言葉による「打ち言葉」について、「今度の休日どこか行こう!」というテーマで、LINEでやりとりしているという設定で、できるだけ実際の場面での言葉に近くなるよう、声を出さずに吹き出しの形の付箋を使って文字だけのやり取りを班シートに貼るようにした。図1はその一つである。後者については、端末上で言葉を入力し、実際に文字でのやり取りを行うことも検討したが、生徒の端末のアプリに制限があり、使用可能なアプリでは実際の「LINE」でのやりとりとは違ったものになると考えられることから、この場面での活用は断念した。

次に、「話し言葉」と「打ち言葉」のそれぞれの特徴について班で話し合い、それを踏まえて、「打ち言葉」を上手に使うにはどういうところに注意する必要があるかを班で話し合った後、代表者が発表してクラス全体でも共有した。(図2、図3)

「話し言葉」の特徴としては、イントネーション、アクセント、強弱、トーンなどの声の要素や、表情、笑顔、身振り手振りなどのノンバーバル・コミュニケーション、「主語がいらない」「岡

山弁が多い」「クッション言葉、和らげる言葉が入る」といったことへの気づきが挙げられた。さらに、「すぐに伝わる」「確認しながら進められる」「気持ちが変わりやすい」「勘違いが起きづらい」といった対面でのやりとりの良さの確認もできた。

「打ち言葉」の特徴としては、「!?:-」などの記号、「w・笑・草」や絵文字・顔文字・スタンプなどの打ち言葉独自の文化、写真や動画、「E」が送れる便利さ、「単語のみが多い」「文が短い」「複数の話題が同時に進行する」「後からでも確認できる」などが挙げられた。さらに、「記号がないと怒っているように感じる」「進行役がいないと進まない」「タイミングが合いづらい」「意思をきちんと伝えなければならない」「表情がわからない」「自分の思っていた意味との齟齬があるかもしれない」との危惧も示された。

「打ち言葉」を上手に使う上での注意点としては、「言葉選び」「言葉と気持ちが合っているか」「誤解されないように」「相手との関係性に応じて使い分ける」「自分の感情をわかりやすく伝える」「話のキーとなるものに反応するのが大事」などが挙げられ、国語分科会報告の、Q4(打ち言葉と書き言葉との違い)に示された打ち言葉の特徴や「手段・媒体ごとの特性をよく認識した上でやり取りすべき」との見解と一致していた。

（二）第二時 「打ち言葉」を「書き言葉」に変換する

授業の最初に、前時の生徒の意見をまとめたプリントと、国語分科会報告」のQ4（打ち言葉と書き言葉との違い）を示して、「打ち言葉」の特色と世代差について確認した後Q29（コミュニケーションの媒体の選び方）を示して、社会においては電子メールでのやり取りが多くなっていることを提示し、高校生にとって気軽に使える「打ち言葉」を、より「書き言葉」に近いメールの文章に書き換える学習に取り組んだ。

前回の班シートを参考に生徒のリアルな「打ち言葉」を使って作成したワークシートの例について、短い単語や文、絵文字、スタンプから言外の気持ちを読み取り、敬語を用いた丁寧な「書き言葉」に書き換えていった。その際、記号や顔文字は一切使わないという条件を伝えたところ、特に文末表現に苦心しながらも、丁寧に書く様子が見てとれた。図4はその一つである。

○相手への気遣いや自分の気持ちを丁寧に伝える表現

- ・ とつぜんすみません。もし明日予定がないのであれば…
- ・ 誘ってもらえてうれしです。
- ・ お誘いありがとうございます。
- ・ 都合の良い時間を教えていただけますか。

○具体的な提案や明確な返答で、話を進めようとする意思表示

- ・ 今はやっている「すずめの戸締まり」を観ませんか？
- ・ 時間は十一時四分の電車で行きましょう！ 都合が悪かったら変更しても構わないです。

- ・ 時間の件、了解です。十一時四分で大丈夫です。

図4 ワークシート「打ち言葉を書き言葉に書き換える」



このように、「打ち言葉」では単語や短文、絵文字やスタンプで簡単に伝えられる意思や気持ちについて、かなり長文で丁寧な「書き言葉」で、相手の気持ちを慮りながら自分の気持ちを表現したメール文を作るための工夫がなされていた。

全体で共有した後、「打ち言葉」を気持ちの伝わる「書き言葉」にする上で大切だと思うことを振り返った。多くの生徒が「省略しないで具体的に書くこと」「丁寧に確認すること」といった意見を挙げていた。「打ち言葉」に見られる文字以外の記号、顔文字、スタンプといった様々な表現によって伝える感情や意図を、それらに頼らずに言葉のみで表現することで、社会人に求められるメールでの「書き言葉」を知り、媒体に応じた「書く力」が必要だということに気付くことができた。

(三) 第三時 メール「書き言葉」を身に付ける

国語科では電子メールの書き方について学習の機会を設けていなかった。情報科や商業科に確認したところ、電子メールにおける機能や項目、使用する文字、ウィルス対策の説明や、メールの例などを示す学習内容はあるが、本文の書き方や注意点といったメールならではの「書き言葉」に関する学習は教科書にも示されていない。そこで、社会人向けのサイトを参考に、図

5のワークシートを作成し、メールの書き方を学習した(注5)。例をもとに本文の書き方を確認した上で、敬語を使ってメールを作成し、気付いたことを振り返った。生徒はこれまでの敬語やアサーションの学習、打ち言葉を書き言葉に書き換える学習を通して学んだことを生かして書くことができた(注6)。

図5 ワークシート「メールの書き言葉」

目標: メール「書き言葉」を身に付けよう。 3年()組()番 氏名()	
<p>①件名</p> <p>②宛名</p> <p>③挨拶</p> <p>④用件</p> <p>⑤挨拶</p> <p>⑥署名</p>	<p>【基本の書き方】</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 件名は宛先と目的を記入する(書く) ② 本文の最初に必ず宛名を書く ③ 宛先に宛てて始める挨拶文を書く ④ 用件は短く簡潔に書く(5行程度を目安としてまとめる) ⑤ 文末に結ぶ挨拶文を書く ⑥ 署名、シグネチャーを書く <p>【メールの注意】</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 宛先が正しいことを確認 ② CC(カーボンコピー)宛先にアドレスがわかる ③ BCC(ブラインドカーボンコピー)宛先は不明 ④ 添付ファイル: 文章や画像のファイルを送付する場合、添付(添付ファイル)として送付する <p>送信前に確認! 件名・内容・メールアドレスに間違いはないか必ず見直すこと</p>
<p>上のメールに返信してみよう。</p> <p>Re: 山久高校へのメッセージの返信</p> <p>宛先: 山久高校へのメッセージの返信</p> <p>送信元: 山久高校へのメッセージの返信</p> <p>件名: 山久高校へのメッセージの返信</p> <p>内容: 山久高校へのメッセージの返信</p>	<p>○ 文面・敬語・丁寧な言葉で</p> <p>○ 内容「メッセージが書けたので、添付ファイルを送ります」ということ</p> <p>○ 上の【基本の書き方】に沿って、会社のメールの書き言葉を書くこと</p> <p>★実際にメールを送ってみよう。</p> <p>【振り返り】メールを書く時の注意点</p>

五 成果と課題

従来は、「読むこと」「書くこと」に時間を割くことの多い国語の授業であったが、「話すこと」について現在の生徒の実態から授業を計画し、新しい「打ち言葉」の学習について取り組んだことで、生徒も当事者としての意識を強く持つて学習に取り組む、意欲的に取り組む姿や自身の言葉の分析に関心を持っている姿を見ることができ、主体的・協働的な活動を実現できた。そういった高校生の生きた言語活動を授業に反映するため、生徒のワークシートや反応をもとに次の授業計画を修正し、再構成していくといった、ライブ感に満ちた授業づくりとなり、教員にとっても発見と刺激に満ちた単元となった。

生徒は、これまで無意識に使っていた「打ち言葉」について、その特徴や利点を改めて確認するとともに、「話し言葉」と比較することで、「気持ちが伝わりにくい」「誤解が生じることがある」「冗談なのか本心なのかわかりにくい」といった打ち言葉の注意点について気付くことができた。普段は記号や顔文字、スタンプなどで、言語化しない感情を補っているようだが、いつもそうできるわけではなく、社会人になって仕事で使用するメールでは、言葉のみで表現し、伝える必要があることに、生

徒は衝撃と困惑を感じたようだった。だが、苦心しつつメール文を完成させる中で、「感情を言葉で表現すること」「相手に応じて適切な言葉遣いをすること」「相手の気持ちを気遣うこと」といった姿勢が大切であると学ぶことができ、日常生活での打ち言葉の使い方に注意を払うようになり、進学・就職後のメールでの打ち言葉にも少し自信を持てたとの感想が出された。

本実践から、高等学校における「打ち言葉」の学習については、現代の高校生にとって取り組むべき課題の一つであり、実際の使用場面に近い学習の場を設定し、体験を通して協働的に考えを深めることで、「実社会に必要な国語の知識や技能」として、現代広く使われている打ち言葉の「特徴や役割、表現の特色を踏まえ、正確さ、分かりやすさ、適切さ、敬意と親しさなどに配慮した表現や言葉遣いについて理解し、使うこと」について確かな学びを実現する実践事例の一つを提示できたと考えている。

今後も「話すこと」の学習の一つとして「打ち言葉」の学習に取り組むとともに、「読むこと」「書くこと」においても、生徒の実態と課題をもとに授業づくりをしていくことで、現代の高校生の言語生活の意識化と改善を図り、豊かで適切な言語生活を実現することにつながると考える。

今後の課題として、「打ち言葉」にも多く見られる現代の若者言葉について、授業での実態把握と分析を試みたいと考えている。昨年度、生徒に「最近の高校生が使う言葉」を募ったところ、インターネット用語や若者の間での流行語など、教員が初めて見聞きする言葉も多くあり、その発生や言語学上の説明、使われ方について、生徒とともに探究することで、言葉への関心や、用途に応じた使い分けといった国語の力を伸ばすことに繋がるのではないかと感じた。現代の若者言葉については堀尾佳以が多様な事例を言語学的に分析している^{注1}。また、雑誌『ユリイカ』の特集においても論じられており、国語の重要なテーマの一つである^{注2}。今後、「現代の国語」や「国語表現」の授業の中で取り上げることができると考えている。

また、現在、生成系AIによる「チャットGPT」といった新技術が急速に広がっており、これらのAIによる文章生成がどのように活用でき、どう取り扱っていくかといった新たな問題も生まれており、注視する必要があるだろう。

「話すこと」と両輪である「聞くこと」についても、「タイプA(タイムパフォーマンス)」に象徴される、「限りある時間の中、なるべく短い時間で成果を得たい」と考える現代の風潮だからこそ、じっくりと相手の話に耳を傾ける「聞くこと」の学習に

正面から取り組んでいく必要があると考える。ともすれば視覚優位で、文字よりも映像や音響の効果を重視する傾向にある現代にあつて、確かな言葉の力を養うことは高等学校の国語教育において重要な責務である。

注1 文化審議会国語分科会「分かり合うための言語コミュニケーション

ケース(報告)」(二〇一八年三月)

2 内山和也「日本語の『打ちことば』の概念に関する一考察」(『別府大学日本語教育研究』(二〇二二年五月))

3 森谷剛「『音声言語の視覚化』を活用した指導の在り方」より良い単元学習開発のために」(二〇二二年九月)

4 日本国語研究学会主催第八四回国語教育全国大会発表資料「山梨県立山梨高等学校国語科『打ち言葉』に関する授業実践」(二〇二二年十一月) 令和三年度国語問題研究協議会取組報告資料

5 マイナビキャリアレシジョン「3分でマスター! ビジネスメールの書き方・送り方の基本」(二〇二二年十一月閲覧) <https://mynavi-c.jp/inexperience/business-mail/>

6 矢野祥子「私たちの話し言葉を見つめ直す話し言葉を通じて、他者とつながる」(二〇二二年十一月) 全国高

等学校国語教育研究連合会第五十五回研究大会岡山大会分
科会④「他者とつながる」（話す／聞く・書くこと）を中
心に）発表資料

7 堀尾佳以『若者言葉の研究』（九州大学出版会、
二〇二二年五月）

8 「現代語の世界―若者言葉から語用論まで」『ユリイカ』
（二〇二二年八月）

〔付記〕本稿は、ノートルダム清心女子大学日本語日本文学会
第二六回大会（二〇二三年六月）で実践報告した内容に加筆修
正したものである。

（やの さちこ／岡山県立邑久高等学校 指導教諭）